

音楽評論内容分類アノテーションガイドライン(第5版)

東京大学大学院情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻

若崎 颯

1. 概要	3
2. 作業手順	4
2.1. 作業の注意点	4
3. 内容ラベル	7
3.1. 大分類	7
3.1.1. 〈録音の背景〉	7
3.1.2. 〈楽曲〉	8
3.1.3. 〈演奏者〉	8
3.1.4. 〈楽器〉	9
3.1.5. 〈演奏〉	9
3.1.6. 〈評価〉	9
3.1.7. 〈その他〉	9
3.2. 〈演奏〉の下位分類	10
3.2.1. 〈演奏:時間的特徴〉	10
3.2.2. 〈演奏:音量的特徴〉	10
3.2.3. 〈演奏:アーティキュレーション〉	10
3.2.4. 〈演奏:エネルギー〉	11
3.2.5. 〈演奏:リズム〉	11
3.2.6. 〈演奏:技術〉	11
3.2.7. 〈演奏:スタイル・理解〉	11
3.2.8. 〈演奏:キャラクター・音色〉	12
3.2.9. 〈演奏:構造〉	12
3.2.10. 〈演奏:コミュニケーション〉	12
3.2.11. 〈演奏:感情〉	13
3.2.12. 〈演奏:その他〉	13
3.3. 〈評価〉の下位分類	13
3.3.1. 〈評価:感じられ方〉	13
3.3.2. 〈評価:対比〉	14
3.3.3. 〈評価:真正性〉	14
3.3.4. 〈評価:その他〉	14

4. 区別に注意を要するラベル	15
4.1. 記述の対象とその「描写」または「評価」の判断	15
4.2. 〈演奏者〉vs 他の分類	16
4.3. 〈演奏〉vs〈評価〉	16
4.4. 〈演奏:構造〉vs 他の〈演奏〉小分類	17
4.5. 〈評価:感じられ方〉vs〈評価:その他〉	17
4.6. 〈演奏:スタイル・理解〉vs〈演奏:感情〉vs〈評価:感じられ方〉	18

1. 概要

このガイドラインでは、音楽評論文書の各文に対して、その文の内容（演奏の描写や演奏者に関する説明など）を分類するラベルを付与するアノテーション作業の内容について説明します。このアノテーションは音楽評論文書の内容分類を計算機処理によって行えるようにすることを目指す研究の一環であり、このアノテーション作業によって得られたラベル付きデータはラベルスキームの評価（本ガイドラインに基づいたアノテーションのアノテータ間の一致率の評価）および自動分類機の構築・評価に利用される予定です。

【CD】ベートーヴェン：三重協奏曲／アンネ＝ゾフィー・ムター＆ヨーヨー・マ&ダニエル・バレンボイム

🕒 2020年5月18日 ■ New Release Selection

👍 いいね！ 0 🐦 ツイート 💬 LINEで送る

これぞまさに白熱のライブ！40年ぶりの再録音となるムター＆ヨーヨー・マにバレンボイムが加わった三重協奏曲は、豊かな歌と覇気が漲る峻烈な競演。各ソロは刻みでさえも生気を放ち、個の主張と絡み合いと融合を絶妙なバランスで果たしていく。これは名手が全力で奏できれば実に面白い曲であることを再認識させる、“三重”協奏曲の醍醐味に溢れた演奏であり、ハイテンションのバックを含めて“21世紀のベスト”と称すべき名演だ。交響曲第7番は弦をたっぷり鳴らした堂々たる表現がバレンボイムならではの。ともあれ本盤は「トリプル」だけで購入の価値あり！

文：柴田克彦
(ぶらあぼ2020年6月号より)



【information】
CD『ベートーヴェン：三重協奏曲／アンネ＝ゾフィー・ムター＆ヨーヨー・マ&ダニエル・バレンボイム』

ベートーヴェン：ピアノ、ヴァイオリン、チェロと管弦楽のための協奏曲 八長調、交響曲第7番

アンネ＝ゾフィー・ムター（ヴァイオリン）
ヨーヨー・マ（チェロ）
ダニエル・バレンボイム（ピアノ/指揮）
ウェスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団

収録：2019年10月、ベルリン（ライブ）他
ユニバーサル クラシックス
UCCG-1867 ¥2800+税

図：音楽評論の例（出典：<https://ebravo.jp/archives/64468>）

2. 作業手順

アノテーション作業はGoogleスプレッドシート上で行われ、基本的な手順は次のとおりです。

1. B列 (id_sentence) の値が0の行(メタデータ行と呼ぶこととします)のS列(開始時刻)に、当該レビューのアノテーション開始時刻を記入する。
2. メタデータ行の下で行で、M列 (sentences) の文を読み、当該文に当てはまる内容ラベルを1つ以上3つ以下選択肢、N, O, P列 (label1, label2, label3) に左詰めで記入(プルダウンリストから選択)する。判断に迷った事由など特筆事項がある場合には、Q列(コメント)に記入し、また、ラベルの判断にどの程度自信があったかをR列(自信度)でプルダウンメニューから選択する。
3. 手順2と同様の作業を次のメタデータ行の手前まで順次行う。
4. 手順1のメタデータ行のT列(完了時刻)に、当該レビューのアノテーション完了時刻を記入する。当該レビューの作業全体に関して特筆事項がある場合にはQ列(コメント)に記入する。
5. 手順1~4の作業を次のメタデータ行以下でも繰り返し行う。

2.1. 作業の注意点

本節で説明する詳細な注意事項の一部に対しては、ガイドライン後半の[各ラベルの説明](#)を先に確認しておくことが理解の助けとなる場合もあると考えられるため、適宜そちらも参照した上で読み進めてください。

- 手順1および手順4での時刻記入について
 - 時刻入力には下記のショートカットキーを用いることを推奨しています。
 - macOS: ⌘+Shift+: または ⌘+Shift+;
 - Windows: Ctrl+Shift+;
 - 参照リンク: [Google スプレッドシートのキーボード ショートカット - パソコン - ドキュメント エディタ ヘルプ](#)
 - ショートカットキーにより時刻が別のタイムゾーンの数値で入力されてしまう場合、スプレッドシートのメニューから「ファイル」→「Googleスプレッドシートの設定」を選び、「タイムゾーン」が「(GMT+09:00) Tokyo」になっていることを確認して「設定を保存」することにより日本標準時で入力されるようになるはずですが、今回は開始時刻と完了時刻の差だけを問題としているため、日本標準時以外のタイムゾーンで入力が行われていても構いません。
- 手順2でのラベルおよび自信度の入力方法について
 - 表示されているプルダウンメニューから選択して入力することができます。選択肢に無い記述は行わないようにしてください。
 - 特にラベルの選択肢は数が多いため、位置によってはプルダウンメニュー全体が表示されない場合もあることに注意してください。
 - 作業に慣れた段階で、選択肢を見る前に既に選択したいラベルが念頭にある場合には、セルに直接入力を行うことで選択肢を絞り込み、補完機能として使うことができます。
- 手順2でのラベル選択(個数等)について
 - 1つの文に対して付けられるラベルは最大で3つまでです。
 - 複数のラベルを付与する場合、各ラベルが実際に該当する文中の範囲が重複することは無いようにしてください。たとえば、「**集中的にバツハに取り組んだのちに福田進一が挑戦したバロック作品集が本作。**」という文に対して、

- 「集中的にバッハに取り組んだのちに福田進一が挑戦したバロック作品集が本作」を〈録音の背景〉のラベル

- 「集中的にバッハに取り組んだ」を〈演奏者〉の説明のラベル

としてアノテーションを行うことは、2つのラベルの受け持つ範囲に重複があるため、今回は認めていません。

(例文出典: <https://ebravo.jp/archives/64478>)

- 複数のラベルを付与する場合は、文の最初から読んでいったときに該当箇所が現れる順にラベルを付与してください。
- 実際には4つ以上のラベルが必要となるような場合であっても、原則として先頭から3つ目までのラベルのみを記載してください。ただし、以下に示す優先順位の低い一部のラベル(内容ラベルの節においても但し書きのあるもの)については、出現順序によらず、優先的に省略してください。
 - 〈楽曲〉ラベルが適するものの、言及が極めて簡潔で〈楽曲〉ラベルを付与するか迷うような場合
 - 〈演奏者〉ラベルが適するものの、言及が極めて簡潔で〈演奏者〉ラベルを付与するか迷うような場合
- 手順2でのラベルの判断について
 - ラベルの判断において、自然に考慮できる範囲の文脈については、これを踏まえた上で筆者の意図を判断し、その意図に応じたラベルを付与することが望ましいです。この観点から、上記作業手順では煩雑な記述を避けるために1行(1文)ずつアノテーションを行っていくことを前提しているものの、実際には必要に応じて前後の文も併せて参照しながらラベルの判断を行うようにしてください。ただし、自然に考慮できるとされる範囲を超えて、積極的に言外の意図を拾うことは避けてください。
 - 未知の固有名詞や語義に自信の無い言葉が現れ、その理解がラベルの判断に影響すると思われる場合、インターネット検索等ですぐに対応できる範囲で適宜意味等を調べながら判断を行ってください。
 - たとえ対象レビューを以前に読んだことがある、あるいはそこで取り上げられている演奏を聴いたことがある場合であっても、その経験から得たアノテータ自身の主観的な意見等は踏まえずに、書いてあるレビューだけから読み取れることを基準としてラベルの判断を行うことを原則としてください。
- スプレッドシートの構成について
 - 背景がグレーのセルは値の入力が想定されていないセルです。
 - A, B列
 - レビューおよび文のID
 - C列
 - レビューの出典URL
 - セルを選択することでアルバムア트워크をプレビューすることができます。
 - D, E, F, G, H列
 - レビューの公開日やレビュー筆者等のメタ情報
 - 通常は参照することなくアノテーション作業を行えると考えられるため、これらの列は列グループとして非表示にしていますが、もし必要があると感じた場合には参照してください。
 - I, J, K, L列
 - CD等のタイトル、収録曲目、演奏者名、録音情報等
 - ラベルの判定において必要なときに適宜参照してください。
 - M列

- アノテーション単位となるそれぞれの文
- N, O, P列
 - 選択されたラベルの記入欄
 - 左列から詰めて記入してください。
- Q列
 - アノテーション作業に際して特筆事項があった場合の記入欄
- R列
 - 各行のラベル選択の自信度を記入する欄
- S, T列
 - 各レビューの作業開始時刻および完了時刻を記入する欄
 - S1セルを選択すると時刻入力のショートカットキーを確認することができます。
- U列
 - 各レビューの所要時間
 - S, T列を適切に記入することで自動計算されます。
- 作業全般について
 - 原則としてスプレッドシートの上から順に、途中を飛ばさずに作業を行うようにしてください。
 - 目安として、作業に慣れた段階で1件のレビューあたりの所要時間(メタデータ行のU列に算出される値)がおおよそ4～5分程度まで短縮されることをまずは目標として取り組んでみてください。
 - 各レビューの文分割は一定のアルゴリズムにより機械的に行っているため、不適切な分割となっている箇所がある可能性もあります。発見した場合はSlackまたはスプレッドシート自体のコメント機能(右クリック→コメントを選択し、@hayatewakasaki@g.ecc.u-tokyo.ac.jp に続けてコメント)によって若崎まで連絡の上、当該レビューは一旦スキップして作業を続行してください。
 - 本アノテーションガイドラインはメニューバー上「表示」の「印刷レイアウト」のチェックを外したほうが閲覧しやすい可能性があります。また、利用可能な場合はタブレット端末やサブディスプレイを用いて作業用シートと並べて閲覧できるようにすると便利です。
 - 作業シートの列幅等は、作業しやすいように適宜変更して構いません。
 - 作業シートのうち、アノテータによる記入を原則として要さないセルについては編集保護を設定してありますが、上記の列幅変更等、必要のある場合には、編集警告メッセージの「OK」を選択し編集を続行してください。

3. 内容ラベル

音楽評論文書の各文に対して、1つ以上3つ以下の内容ラベルを付与します。詳細な定義は後述しますが、基本的な大分類は以下の7つです。

- 〈録音の背景〉
- 〈楽曲〉
- 〈演奏者〉
- 〈楽器〉
- 〈演奏〉
- 〈評価〉
- 〈その他〉

これらのうち、〈演奏〉および〈評価〉の2つに対しては、より詳細な小分類を設けています。〈演奏〉の小分類は以下の12個を、

- 〈演奏: 時間的特徴〉
- 〈演奏: 音量的特徴〉
- 〈演奏: アーティキュレーション〉
- 〈演奏: エネルギー〉
- 〈演奏: リズム〉
- 〈演奏: 技術〉
- 〈演奏: スタイル・理解〉
- 〈演奏: キャラクター・音色〉
- 〈演奏: 構造〉
- 〈演奏: コミュニケーション〉
- 〈演奏: 感情〉
- 〈演奏: その他〉

〈評価〉の小分類は以下の4個を設けています。

- 〈評価: 感じられ方〉
- 〈評価: 対比〉
- 〈評価: 真正性〉
- 〈評価: その他〉

〈演奏〉あるいは〈評価〉に該当するラベルを付与する場合、小分類なしの形態(〈演奏〉単体あるいは〈評価〉単体)はとらず、必ずいずれかの小分類を伴うようにするため、結局、実際に付与する可能性のあるラベルは $(7-2)+12+4=21$ 種類があることになります。以下のサブセクションでは各ラベルの判断基準についてより詳しく説明します。なお、ラベル間の区別に注意を要する場合の対応については[後の節](#)でも判断方法の目安を示すので、そちらも必要に応じて参照してください。

3.1. 大分類

以下の部分で掲載されている例文はすべて『ぶらあぼ New Release Selection』(<https://ebravo.jp/archives/category/nrs>)からの引用で、角括弧内の整理番号は[別表](#)に従い引用元の記事のURLと対応しています。また、下線は筆者によるもので、当該ラベルを付与する根拠となる部分を示しています。なお、ラベルを付与する単位についての説明は[作業手順の節](#)を参照してください。

3.1.1. 〈録音の背景〉

そのCDが収録・発売された背景や、録音方法等の特徴に言及している文に付与します。

- 例1. チェコ・フィルのメンバーを中心とする弦楽四重奏団の東京ライヴ。[30]
 例2. 「ライヴのようなセッション録音」による親密な演奏で、津野田の繊細な表現と、西江の清潔な音色が相性抜群。[35]

例1の「東京ライヴ」のような簡潔な言及も拾い、このラベルに含めることに注意してください。

3.1.2. 〈楽曲〉

収録楽曲の紹介・説明や、その楽曲の作曲者に対する言及、およびプログラミングを含むそれらに対する評価が含まれている文に付与します。

- 例1. サリエリのオペラアリアに基づく変奏曲や、「きらきら星変奏曲」としてよく知られるK.265、第1楽章に変奏曲形式を置いた「トルコ行進曲付」ソナタ、クラリネット五重奏曲に基づく変奏曲など、コロコロと表情を変えるモーツァルトの変奏曲が、喜びに溢れた音色で描き出される。[7]
 例2. 今回のディスクはヘーゲルやベートーヴェンと同時代の詩人フリードリヒ・ヘルダーン(1770～1843)の詩に付曲された歌曲を集めたもので、深い精神性に満ちたこれらの作品で、長島は色彩豊かに変化する美声を駆使して詩の世界観を気高く伝える。[8]
 例3. 曲によっては自身でアレンジも行なっているが、どの曲も福田のフレキシブルな技巧と表現力が十全に生かされていて唸る。[403]
 例4. 両曲のすばらしい緩徐楽章における驚見のピアノの深みも印象的。[405]
 例5. 要求される技術の高さ、表現の幅の広さは果てしないが、そのぶん伊藤の音楽性と技術の高さがより鮮明に浮かび上がる。[407]

言及が極めて簡潔なためにこのラベルを付与するか迷うような場合は、その言及によって、クラシック音楽についてよく知らない人がメタ情報として与えられる楽曲名だけでは読み取れないような情報が付け加えられていると判断される場合には付与する、という基準で判断を行ってください。そのような場合であって、かつ当該文への付与が適当と思われるラベルが3つを超える場合には、出現順序にかかわらずこのラベルを優先的に省略するようにしてください。以下の2つの例文の下線部分はこの基準によって〈楽曲〉ラベルが付与される事例です。

- 例6. 12歳からイギリスに住み、現在同国で教授も務めている小野明子が想いを込めて作りあげた、英国ヴァイオリン小品集アルバム。[5]

- 例7. 鈴木理恵子と若林顕の夫妻によるデュオが、2つの大作ソナタに挑んだ。[3]

なお、この基準によって当該文に適するラベルが無いとみなされる場合、すなわち文中の記述が単なるメタ情報の繰り返しにとどまっているような場合は、〈その他〉ラベルを選択するようにしてください。

- 例8. その曲目はヒンデミット、バルトーク、プロコフィエフにメシアン、そしてヤナーチェク。
 [206] (該当ラベルは〈その他〉のみ)

3.1.3. 〈演奏者〉

演奏者の説明(来歴など)や、演奏者の特徴・評価等(ただし、そのCDでの演奏を明確に踏まえて書かれ、演奏者単体への評価というよりも演奏全体の評価とみなせる記述は、〈評価〉カテゴリのラベルを適用し、対象外とします)について述べている文に付与します。

- 例1. 小澤指揮水戸室内管とアルゲリッチ——なんともゴージャスなコラボに選ばれた曲は、ベートーヴェンの協奏曲第1番。[0]
 例2. 12歳からイギリスに住み、現在同国で教授も務めている小野明子が想いを込めて作りあげた、英国ヴァイオリン小品集アルバム。[5]

〈楽曲〉と同様に、言及が極めて簡潔なためにこのラベルを付与するか迷うような場合は、その言及によって、クラシック音楽についてよく知らない人がメタ情報として与えられる演奏者名だけからは読み取れないような情報が付け加えられていると判断される場合には付与する、という基準で判断を行ってください。そのような場合であって、かつ当該文への付与が適当と思われるラベルが3つを超える場合には、出現順序にかかわらずこのラベルを優先的に省略するようにしてください。以下の例文の下線部分はこの基準によって〈演奏者〉ラベルが付与される事例です。

例3. 鈴木理恵子と若林顕の夫妻によるデュオが、2つの大作ソナタに挑んだ。 [3]
〈楽曲〉の場合と同様に、この基準によって当該文に適するラベルが無いとみなされる場合、すなわち文中の記述が単なるメタ情報の繰り返しにとどまっているような場合は、〈その他〉ラベルを選択するようにしてください。

3.1.4. 〈楽器〉

演奏者の使用しているものなど、楽器に関する記述で、演奏内容の描写とは思われないものを含む文に対して付与します。

例1. ソプラニーノからコントラバスまで7種の楽器を用いて広い音域をカバーしながら、80名を超える奏者が重層的かつ柔らかな響きを奏でている。 [2]

例2. 使用されたファツィオリのピアノの音色も見事で、伊藤の音色の幅がさらに広がっている。 [407]

3.1.5. 〈演奏〉

演奏内容の描写が含まれる文に付与します。小分類の詳細については後述します。

3.1.6. 〈評価〉

筆者による演奏の評価が含まれる文に付与します。小分類の詳細については後述します。

なお、演奏以外の部分(録音背景や楽曲など)に対する評価を含む文については、この〈評価〉ラベルの対象外とし、それぞれの評価対象と一致するラベル(〈録音背景〉や〈楽曲〉など)の付与によって対応することとします。[後の節](#)での説明も参照してください。

また、演奏の描写と演奏の評価のどちらがより適切かの判断に迷う場合には、その文の表現が良い／悪いといった価値判断を含むかどうかで判断を行い、含む場合には〈評価〉以下のラベルを、含まない場合には〈演奏〉以下のラベルを選択してください。こちらについても[後の節](#)でより詳しく説明されます。

3.1.7. 〈その他〉

上記いずれのラベルも不適当と判断された文に対して付与します。

例1. 音楽祭の概要を伝えるダイジェスト映像も収録され、90年代にこの地に蒔かれた種が、いま大きく花開いていることを伝えてくれる。 [0]

- 演奏ではなくDVD映像に関する言及であり、今回の他のラベルには該当しない。

例2. 例えば、シベリウスの技巧的なパッセージだけでなく、緩徐部へ耳を傾けてほしい。

[1]

- 読者への語りかけのような内容。

3.2. 〈演奏〉の下位分類

3.2.1. 〈演奏：時間的特徴〉

テンポの設定やアゴーギク、タイミングのとり方など、演奏の時間的な特徴を記述している文に付与します。

- 例1. グリーグは、遅めのテンポで一音一音丁寧に奏され、細部まで明瞭かつ美しく表現されていく。[33]
- 例2. 絶妙な演奏技術により、楽器の音の伸びに従ったテンポで、楽器の能力を可能な限り引き出した起伏豊かな演奏が繰り広げられる。[71]
- 例3. ソナタでは、冒頭から柔らかで温かみのある中音域の響かせ方と和音のバランスに既に非凡なものを感じさせるが、その表情は遅めのテンポを基調としながら絶妙なアゴーギクを駆使して旋律を感じ抜いており、それはまるで冥界からの声のように響く。[28]
- 例4. フィナーレではエンジンが焼き切れる寸前まで加速。[31]

3.2.2. 〈演奏：音量的特徴〉

演奏の強弱や音量の特徴を記述している文に付与します。ただし、局所的な音量の特徴というよりも、大域的な音楽の中でのバランス等を描写することに主眼があるとみなせる場合には、後述の〈演奏：構造〉を優先して付与してください。

- 例1. 遠くの地鳴りのようなトレモロが印象的な1楽章から、抑制美の効いた2楽章への移行がホロリとさせる「悲愴」、モダン・ピアノの音の伸びの良さと残響を生かし切った「月光」、冒頭の三音のモチーフから強烈に惹きつけ、強弱表現のレンジが極めて豊かな「熱情」。[75]
- 例2. 交響曲第7番は弦をたっぷり鳴らした堂々たる表現がバレンボイムならではの。[401]

3.2.3. 〈演奏：アーティキュレーション〉

演奏のアーティキュレーションについて描写している文に付与します。

- 例1. しかし、細部にわたって入念に構築されたアーティキュレーション、ソロと合奏部の音響バランスの妙、地味ながら素晴らしい音色的アクセントをもたらしているヴィオローネ、テオルボの魅惑的響きなど、繰り返し聴き込むにしたがってその味わいは徐々に増していくだろう。[4]

ここでの「アーティキュレーション」の範囲としては「(音と音との)区切り方」という原義をベースにして解釈を行うこととし、特に各音の発音(アタック)の方法や音と音の繋ぎ方の特徴の多くが該当するものとして判断してください。この中には、楽譜上の記号でも示されるような、レガート、スタッカート、アクセント、テヌート、マルカートといった要素が含まれると同時に、ここに挙げた用語あるいは「アーティキュレーション」という用語自体の出現の有無を問わず、実質的にアーティキュレーション(音の区切り方)を描写しているとみなせるレビュー中の言語表現も、〈演奏：アーティキュレーション〉の該当範囲として判断するようにしてください。

なお、強弱に対する言及としての性格が強いとみなせる言語表現に関しては、〈演奏：音量的特徴〉のラベルを優先的に付けるようにしてください。

3.2.4. 〈演奏：エネルギー〉

演奏に込められたエネルギーの観点からの描写を行っている文に付与します。

- 例1. 初期の第18番では第2楽章が生き生きと弾んで秀逸。[9]
- 例2. 各ソロは刻みでさえも生気を放ち、個の主張と絡み合いと融合を絶妙なバランスで果たしていく。[401]
- 例3. 特にサン＝サーンスの覇気に満ちた名演は、出演者、関係者の思いが集約した、感動的な記録となった。[409]

3.2.5.〈演奏：リズム〉

演奏のリズムの特徴について描写している文に付与します。明示的に「リズム」という表現が含まれる文が主になる可能性が高いですが、それに限らず該当すると思われる文があった場合には付与してください。

- 例1. しなやかに躍動するリズムが光り、第2部後半の迫真性も耳を奪う。[12]
- 例2. アンコール(ハンガリー舞曲第5番)の農耕民族を思わせるリズム感はやはり唯一無二だ。[402]

3.2.6.〈演奏：技術〉

演奏の技術的・技巧的な特徴を描写している文(ただし、〈演奏〉大分類の他のラベルのほうより相応しいと思われる文を除く)に付与します。

- 例1. 遠くの地鳴りのようなトレモロが印象的な1楽章から、抑制美の効いた2楽章への移行がホロリとさせる「悲愴」、モダン・ピアノの音の伸びの良さと残響を生かし切った「月光」、冒頭の三音のモチーフから強烈に惹きつけ、強弱表現のレンジが極めて豊かな「熱情」。[75]
- 例2. 曲によっては自身でアレンジも行なっているが、どの曲も福田のフレキシブルな技巧と表現力が十全に生かされていて唸る。[403]

3.2.7.〈演奏：スタイル・理解〉

演奏スタイルの描写や、演奏者の演奏に対する姿勢を反映した演奏描写を行っている文に付与します。特に、演奏に反映されている演奏者の思考や知識等に対して言及している文に対しても付与します。

- 例1. 超絶技巧を誇示するのでもなく、単音で丁寧に綴られる旋律線は、的確な拍節感覚とフレージング、自然な伸縮を伴い、様々に色彩を変えてゆく。[6]
- 例2. ベートーヴェンの“先”を知る伊藤は、この作曲家の革新性、表現の奥深さを隅々まで理解した演奏を聴かせ、今回は「幻想曲風」、変奏曲の楽章を含んだ後期ソナタ、そして変奏曲によるプログラムに臨んだ。[407]

なお、単に「演奏スタイル」と言った場合に該当する言語表現は多岐にわたるため、その中にはより具体的な他の〈演奏〉小分類にも該当するものも含まれることが予想されます。そのような場合には、〈演奏：スタイル・理解〉は選択せず、より具体的なラベルのほうを優先して選択するようにしてください。たとえば、次の例文は全体を〈演奏：スタイル・理解〉とするのではなく、前半部分(グレー背景部分)を〈演奏：音量的特徴〉、後半部分を〈評価：その他〉とする対応が望ましいです。

- 例3. 交響曲第7番は弦をたっぷり鳴らした堂々たる表現がバレンボイムならではの。[401]
(グレー背景部分は〈演奏：音量的特徴〉)

3.2.8.〈演奏：キャラクター・音色〉

演奏の音色や、サウンドの印象、雰囲気を描写している文に付与します。

- 例1. これほど優しく明るいモーツァルトこそは、さまざまな状況に置かれた聴き手の心情に寄り添い、深く沁み入るのではないだろうか。[7]
- 例2. 楽曲への深い愛情が、確かな技巧で1本の笛に吹きこまれた瞬間、広大な響きの宇宙を形創る。[400]

3.2.9.〈演奏：構造〉

演奏の中で音楽の構造をどのように描いているかを説明している文に付与します。フレージングやバランス感に対する言及などを含みます。

- 例1. 序奏の半音階進行が全曲の各所に現れる緻密な構成も解りやすく聴かせる。[9]
- 例2. しかし、細部にわたって入念に構築されたアーティキュレーション、ソロと合奏部の音響バランスの妙、地味ながら素晴らしい音色的アクセントをもたらしているヴィオローネ、テオルボの魅惑的響きなど、繰り返し聴き込むにしたがってその味わいは徐々に増していくだろう。[4]
- 〈演奏：音量的特徴〉との区別に注意。

フレーズの捉え方に関する記述は、他のラベルの中に特により当てはまると思われるものが無ければ、〈演奏：構造〉のラベルを与えることを原則としてください。

- 例3. 超絶技巧を誇示するのではなく、単音で丁寧に綴られる旋律線は、的確な拍節感覚とフレージング、自然な伸縮を伴い、様々に色彩を変えてゆく。[6]
- 例4. 大地に根を張ったようなどっしりとしたテンポ、硬質なサウンドに、美しいソロや大見得を切るフレーズが色を添える。[402]

また、演奏中での和声法(和音の配置により特徴づけられる楽曲構造)の表現方法に関する記述も〈演奏：構造〉による対応を原則としてください。

- 例5. 肩肘張らずとも十分な質感があり、精妙な和声感と流麗な流れで、ベートーヴェンがあたかもシューベルトのように響く。[202]

3.2.10.〈演奏：コミュニケーション〉

演奏の中で生じている対話、および演奏者と聴き手との間のコミュニケーションについて描写している文に付与します。

- 例1. 各楽器と親密に呼び交わしながらオケを变幻自在に色づけするあたり、さすがの千両役者ぶり。[0]
- 例2. 今回のディスクはヘーゲルやベートーヴェンと同時代の詩人フリードリヒ・ヘルダーリン(1770～1843)の詩に付曲された歌曲を集めたもので、深い精神性に満ちたこれらの作品で、長島は色彩豊かに変化する美声を駆使して詩の世界観を気高く伝える。[8]
- 例3. 切々と語りかける1楽章、遅めのテンポでゆったり歌う2楽章、生き生きとしたマズルカの表現がスパイスとなる3楽章へと続く。[204]

楽器(奏者)同士の関わり方の描写(ただし、音楽の構造の描写とみなすほうが自然なものは除く)もこのラベルの付与対象です。

- 例4. 中堅の名手、水谷と金子との三重奏曲第1番は、盤石のピアノに乗せて、彼らのフレッシュな勢いが引き出される。[405]

なお、演奏者と聴き手との間のコミュニケーションについての描写とみなせる場合であっても、〈演奏〉大分類の他のラベルに相応しいものがある場合には、他のラベルのほうを優先してください。たとえば、次の例文のグレーの背景の範囲では、「伝わってきた」という言葉は使われている

ものの、範囲全体として「シューベルトの苦悩」という感情の演奏表現を描写する一節であると解釈可能であり、〈演奏：感情〉を優先的に選択することが望ましいです。

- 例5. 特に名曲「幻想曲へ短調D940」は、構築美が明瞭に示されることで、作品に込められたシューベルトの苦悩が一層鮮やかに伝わってきた。[200]（グレー背景部分は〈演奏：感情〉）

3.2.11. 〈演奏：感情〉

演奏に込められた感情・情感を描写している文に付与します。聴き手あるいは演奏者自身が抱く感情ではないことに注意してください。

- 例1. 全体にニュアンス豊かでリリズムが横溢し、カデンツァをはじめ力強さにもこと欠かない。 [33]
例2. 彼女らしい凜とした空気を貫きながら、要所で深い憂いや激しい感情を表出させる、詩情に満ちた演奏が収められている。 [37]

3.2.12. 〈演奏：その他〉

以上の分類には当てはまらないものの何らかの形で演奏の描写を行っている文に付与します。

3.3. 〈評価〉の下位分類

以下では〈評価〉ラベルの下位分類について詳細な説明を述べますが、[この大分類自体の定義を説明している節](#)で既に述べたような、他の大分類との対比の中での〈評価〉カテゴリそのものの定義、および注意点にも留意して判断を行ってください。

3.3.1. 〈評価：感じられ方〉

演奏の聴き手の感情的応答（「息を呑むような」や「恐ろしい」のような表現）への言及によって演奏の評価を描写している文に付与します。演奏者の感情（〈演奏：スタイル・理解〉相当）や演奏そのものが表現する感情（〈演奏：感情〉相当）とは異なることに注意してください。

- 例1. 大詰めの詠嘆の美は胸に迫る。 [3]
例2. 彼女の高い技巧は豊かな詩情と安心感につながり、作曲家ごとの特徴もさりげなく弾き分けられて、実に巧みで心地よい。 [5]

なお、レビューの著者の感情そのものの記述だけではなく、演奏を聴いた他の人に生じるであろうと著者が推量する感情的応答を記述している箇所にもこのラベルを適用してください。

- 例3. これほど優しく明るいモーツァルトこそは、さまざまな状況に置かれた聴き手の心情に寄り添い、深く沁み入るのではないだろうか。 [7]
例4. 図らずもこの時世、ブラームスの室内楽は何よりの慰めにもなるだろう。 [405]

特に〈評価：その他〉との区別において、慎重な判断を要する状況が多くあることが予想されるため、[これらの区別について詳述する後の節](#)も参照した上で注意して判断を行うようにしてください。

3.3.2. 〈評価：対比〉

他の演奏（他の演奏者による演奏や、他の作曲家の楽曲の演奏等）との対比によって演奏の評価を行っている文に付与します。

- 例1. 若者らしい清新さと、オISTRAフら往年の巨匠を彷彿させる熟達した気高さ。 [40]

- 例2. 肩肘張らずとも十分な質感があり、精妙な和声感と流麗な流れで、ベートーヴェンが
あたかもシューベルトのように響く。[202]

3.3.3.〈評価:真正性〉

作曲者の意図や、作曲年代等の作曲背景に即した演奏様式、あるいは楽曲そのものに対して、適切な解釈が行われている演奏か否か、という観点から演奏の評価を行っている文に付与します。

- 例1. 真摯で丁寧なアプローチは、特にピリオド奏法に寄せてゆかずとも、魅力的なバロック音楽が紡ぎ出せることを証明。[58]
例2. ルイ14世への御前演奏に供された「コンセール」や、オペラ作品から抜粋された組曲での、しっかりした様式感に裏付けされた折り目正しい快演は、工藤ならでは。[64]
例3. 衰えぬ美音と豊かな経験値で、懐深く全体を包み込むような演奏は、そのままブラームスの魅力となっている。[405]

3.3.4.〈評価:その他〉

以上の分類に当てはまらないが演奏の評価を行っている文に付与します。「その他」ではありませんが、〈評価〉の多くの文が該当することが想定されています。

- 例1. 第96番「奇蹟」もノンビブラートの透明な響きがきれいで爽やかだ。[9]
例2. 共演のオケやピアノも、単なる“伴奏”を超えた、いい仕事をしている。[1]
○ 演奏の様相(特に〈演奏:コミュニケーション〉に該当するような内容)の描写ではなく、演奏の評価を述べていると考えられる。
例3. アンコール(ハンガリー舞曲第5番)の農耕民族を思わせるリズム感はやはり唯一無二だ。[402]

4. 区別に注意を要するラベル

この節では、前節で説明した各内容ラベルのうち、互いの区別を行う上で特に注意を要すると思われるものについて、判断方法の例を示します。前節のラベルの定義を解釈して実際にアノテーションを行う際に参考としてください。

4.1. 記述の対象とその「描写」または「評価」の判断

今回用いるラベルスキームでは、レビュー中の演奏に関する記述に特に着目し、アノテーション自体もしやすくするために、演奏に関する記述の分類を特に詳細にしています。レビュー中では、楽曲や演奏者についての記述も、価値判断を多分に含まない描写的な内容と価値判断を含む評価的な内容の両方から成ることが想定されますが、今回の作業では、この描写と評価については区別を行うことなく、それぞれ〈楽曲〉または〈演奏者〉という形で1つのラベルに一本化しています。一方で、演奏に関する記述は〈演奏〉と〈評価〉の2つの大分類ラベルに分割した上で、それらをさらに詳細な小分類に区分する形式をとっています。ここで、本来ならば〈演奏〉と〈評価〉はそれぞれ〈演奏描写〉〈演奏評価〉のような名称としたほうが〈楽曲〉や〈演奏者〉との対比における一貫性は高くなるものの、表現を簡潔にし視認性を高める意味でも、名称の一部を省略した〈演奏〉〈評価〉といったラベル名を用いることにしています。このような定義になっていることに留意した上で判断を行ってください。

記述対象	描写 (主に価値判断を含まない)	評価 (主に価値判断を含む)
楽曲	〈楽曲〉	
演奏者	〈演奏者〉	
演奏	〈演奏〉 〈演奏: 時間的特徴〉 〈演奏: 音量的特徴〉 〈演奏: アーティキュレーション〉 〈演奏: エネルギー〉 〈演奏: リズム〉 〈演奏: 技術〉 〈演奏: スタイル・理解〉 〈演奏: キャラクター・音色〉 〈演奏: コミュニケーション〉 〈演奏: 感情〉 〈演奏: その他〉	〈評価〉 〈評価: 感じられ方〉 〈評価: 対比〉 〈評価: 真正性〉 〈評価: その他〉

特に、演奏に関する記述だけ細分化されてはいるものの、アノテーション作業においては初めに文の記述対象が楽曲、演奏者、演奏など、大分類のいずれに該当するか判断を行う必要があることに注意し、曲目に関する評価記述に対して演奏の〈評価〉のラベルを付けてしまう、などのミス可能な限り避けるようにしてください。たとえば、次に挙げる例文は演奏の評価ではなく、楽曲・プログラムに対する評価または説明であり、〈楽曲〉ラベルを与えるのが適切です。

例1. 有名作とは言えずとも、どの曲も聴く人それぞれの心に寄り添う佳品ばかりで、聴き進めるたびに愛すべき曲に出会える喜びは大きい。 [5]

例2. 両曲のすばらしい緩徐楽章における驚見のピアノの深みも印象的。 [405]

例3. 要求される技術の高さ、表現の幅の広さは果てしないが、そのぶん伊藤の音楽性と技術の高さがより鮮明に浮かび上がる。 [407]

4.2. 〈演奏者〉vs 他の分類

次のレビューにおいて、下線部分に該当するラベルを検討します。

例1. 弦楽器奏者にとって、バッハの無伴奏作品が“聖典”なら、『笛の楽園』はリコーダー吹きにとってのそれか。17世紀オランダの盲目の奏者、ファン・エイクが遺した全150曲に及ぶ曲集。名手・江崎浩司は4年前から、世界でも珍しい全曲録音に取り組む。 [400]
一見すると、〈録音の背景〉と〈演奏者〉のどちらの定義を適用することもできるように思われますが、今回の作業では、演奏者の単なる説明を超えてこのCDの録音に至った経緯を示すことが筆者の意図であるという判断を大きな飛躍を要さず行えるため、〈録音の背景〉を優先して選択するのがより相応しいと考えます。

また、次のレビューの下線部分についても類似した判断を行うことができます。

例2. 美しい音色と溢れる歌心、確かな技術によって独逸ロマン派を中心とした作品の魅力を伝え続けてきた伊藤恵。近年は満を持して、積極的にベートーヴェンに取り組んでいる。ベートーヴェンの“先”を知る伊藤は、この作曲家の革新性、表現の奥深さを隅々まで理解した演奏を聴かせ、今回は「幻想曲風」、変奏曲の楽章を含んだ後期ソナタ、そして変奏曲によるプログラムに臨んだ。 [407]
こちらでも、下線部を〈演奏者〉の説明であるとみなすことも不可能ではないものの、それにしては具体性に欠ける点、および記述内容のこの録音との関連性が高く、どのような楽曲理解・演奏スタイルを演奏者が発揮したかの描写に筆者の意図があると考えられる点から、下線部および背景がグレーの部分までを含めて〈演奏：スタイル・理解〉を選択することが好ましいです。

このように、単体で読まれたとしても演奏者の説明として成立しうる記述の中には、実質的な意図が単なる演奏者の説明よりも踏み込んだ、録音背景や演奏スタイルの説明にあるとみなせる事例が一定数存在していると考えられます。実際の作業の中ではここに示した判断例を参考にラベル選択を行うようにしてください。

4.3. 〈演奏〉vs 〈評価〉

前述のように、演奏に関するある記述に対するラベルとして〈演奏〉（演奏描写）と〈評価〉（演奏評価）のどちらがより適切かの判断に迷う場合には、その文の表現が良い／悪いといった価値判断を含むかどうかで判断を行い、含む場合には〈評価〉以下のラベルを、含まない場合には〈演奏〉以下のラベルを選択してください。たとえば、次のような事例の各下線部は、読み方によっては描写とも評価ともとれるような記述ですが、上記の基準に則り、ここでは〈評価〉に属する小分類を選択することが望ましいと考えられます。

- 例1. 彼女の高い技巧は豊かな詩情と安心感につながり、作曲家ごとの特徴もさりげなく弾き分けられて、実に巧みで心地よい。 [5]（下線部は〈評価：感じられ方〉）
例2. 第96番「奇蹟」もノンビブラートの透明な響きがきれいで爽やかだ。 [9]（下線部は〈評価：その他〉）
例3. 緩徐楽章の木管の絡みも美しく、終楽章の対位法楽句やウィット感の表出も楽しい。 [9]（下線部は〈評価：その他〉）

このような事例において、下線部は演奏の描写とみなすにはやや具体性に乏しい内容であり、一方で演奏への価値評価を行っている判断ができるため、〈評価〉以下の小分類を付けることとしています。

4.4. 〈演奏：構造〉vs 他の〈演奏〉小分類

〈演奏：構造〉ラベルは他のラベルとの区別がやや不明瞭な場合も多く、特に〈演奏：コミュニケーション〉との区別には迷う状況も少なくないと思われます。ここでは、まずこれら2つのラベルに関する判断基準の共有を図り、いくつかの事例を観察します。次の例文は協奏曲の録音に対する記述です。

例1. 常に前面に出ようとするソリストが多い中、出るべき場面では出て、引くべき時は引く。 [1] (下線部は〈演奏：構造〉)

一見すると〈演奏：構造〉と〈演奏：コミュニケーション〉のどちらにも該当しそうに思えますが、こうした場合、今回の作業では、この文の描写の主眼はソリストとオーケストラのコミュニケーションというよりも、音楽全体の構造の扱い方にあると考え、〈演奏：構造〉のラベルを適用する、という方針で判断を行います。次の例文の下線部分も同様の判断になります。

例2. 各ソロは刻みでさえも生気を放ち、個の主張と絡み合いと融合を絶妙なバランスで果たしていく。 [401] (下線部は〈演奏：構造〉)

一方、次のような状況では、描写の主眼は奏者間の関わり方で、音楽の構造の描写までは至っていないと捉え、〈演奏：コミュニケーション〉を選択したいところです。

例3. 中堅の名手、水谷と金子との三重奏曲第1番は、盤石のピアノに乗せて、彼らのフレッシュな勢いが引き出される。 [405] (下線部は〈演奏：コミュニケーション〉)

以上のように、〈演奏：構造〉と他のラベルの区別には迷う場合には、その記述の主眼が音楽の構造をどのように描いているかにあるか否かを総合的に判断し、ラベルの選択を行うようにしてください。

〈演奏：コミュニケーション〉との区別以外にも、次の事例の下線部分のように、記述内容が〈演奏：音量的特徴〉と近い場合もありますが、同様の基準にしたがって、〈演奏：構造〉を選択することが望ましいです。

例4. しかし、細部にわたって入念に構築されたアーティキュレーション、ソロと合奏部の音響バランスの妙、地味ながら素晴らしい音色的アクセントをもたらしているヴィオローネ、テオルボの魅惑的響きなど、繰り返し聴き込むにしたがってその味わいは徐々に増していくだろう。 [4] (下線部は〈演奏：構造〉)

4.5. 〈評価：感じられ方〉vs 〈評価：その他〉

〈評価〉に属する小分類の中でも、ある演奏評価の記述が〈評価：感じられ方〉に属するのか、そうではなく単に〈評価：その他〉となるのかは、しばしば判断が難しいところです。

〈評価：感じられ方〉に該当するのは、「演奏の聴き手の感情的応答への言及」および「レビューの著者の感情そのものの記述だけではなく、演奏を聴いた他の人に生じるであろうと著者が推量する感情的応答」と定義される内容によって演奏の評価(価値判断)を行っている部分で、以下のような事例(前出のもの)に当てはまります。

例1. 大詰めの詠嘆の美は胸に迫る。 [3]

例2. 彼女の高い技巧は豊かな詩情と安心感につながり、作曲家ごとの特徴もさりげなく弾き分けられて、実に巧みで心地よい。 [5]

例3. これほど優しく明るいモーツァルトこそは、さまざまな状況に置かれた聴き手の心情に寄り添い、深く沁み入るのではないだろうか。 [7]

例4. 図らずもこの時世、ブラームスの室内楽は何よりの慰めにもなるだろう。 [405]

一方、記述の直接的な対象が聴き手の感情やリアクションの類ではなく、演奏そのものを主観的に形容・評価するような体裁をとっている場合は、〈評価：その他〉が適します。以下のような事例がこのような判断に相当します。

例5. これぞまさに白熱のライヴ！ [401]

例6. ベテランの大山のヴィオラが加わった四重奏曲第3番は、ぐっと安定感と渋みが加わった好演で、作品の味わいが一層際立つ。 [405]

例7. 特にサン＝サーンスの覇気に満ちた名演は、出演者、関係者の思いが集約した、感動的な記録となった。 [409]

以上のような事例を対照した上で、演奏に対する主観的な評価のうち、主観的なもの（聴き手の感情等）の主観的描写を通していわば間接的に演奏への評価を書いているものは〈評価：感情〉が、客観的なもの（演奏自体等）への主観的評価を直接書いているものは〈評価：その他〉が、それぞれ適したラベルになる、というように理解しておけば、概ね混乱は解消されるのではないかと考えられます。

4.6. 〈演奏：スタイル・理解〉vs〈演奏：感情〉vs〈評価：感じられ方〉

これら3つのラベルには、いずれも感情についての記述が含まれますが、その感情の主体によってラベルの区別が行われることに注意してください。

〈演奏：スタイル・理解〉は感情についての内容だけを対象としたラベルではありませんが、演奏者自身の、必ずしも演奏に表出するとは限らないような感情についての描写が演奏スタイルとみなせる場合があります。

例1. 楽曲への深い愛情が、確かな技巧で1本の笛に吹きこまれた瞬間、広大な響きの宇宙を形創る。 [400]（下線部は〈演奏：スタイル・理解〉）

〈演奏：感情〉は演奏内容自体を感情的な語彙によって形容している場合に適用されます。

例2. スカルラッティでの上品で柔らかな歌いまわし、ヴァイスのチャコーナにおける明晰さ、ラモーの躍動、そして最後のグルックでの情感。 [403]（下線部は〈演奏：感情〉）

〈評価：感じられ方〉は、筆者を含めた演奏の聴き手が覚える感情、あるいは感情的な応答を含む部分が該当します。

例3. 彼女の高い技巧は豊かな詩情と安心感につながり、作曲家ごとの特徴もさりげなく弾き分けられて、実に巧みで心地よい。 [5]（下線部は〈評価：感じられ方〉）